患者の最期 誠実に関わる

秋田市 ホスピス医の言葉

いのちのはとりで —6—

廊下には、その朝取ってきたヤマザクラが咲き乱れていた。個室のドア横の小机に、折り紙の小物が置かれていた。初めて入ったホスピスは、やわらかな光が感じられる場所だった。死に直面する患者に対し、医療者らはどう向き合っているのだろう。言葉遣いや表情を見てみたくて、私は秋田市のホスピスに通った。

JR秋田駅から車で20分。秋田港にもほど近い外旭川病院ホスピス病棟（34床）。南向きの個室の窓からは、遠く鳥海山が見える。

1日2回行われるカンファレンスでは、ホスピス長の嘉藤茂医師(62)を中心に、看護師、ケアスタッフも集まり、患者の様子が1人ずつ報告される。「おもゆ、飽きたらしいです」「『さみしい』という言葉が出ました」「午後に長男さんが来ます」。がん終末期の患者の容体は刻々と変化する。そのニュアンスを共有するのが大事だ。「治す」のが目的の一般病院で患者はまず「病気のデータ」としてみられる。言葉やしぐさが重視されることはない。そこがホスピスと決定的に違う。

「もうできる治療がない」と宣告されたがん終末期の患者らが入るホスピス。痛みの緩和治療を受けて安定し、自宅療養に切り替えるケースもあるが、患者の多くは死に直面し、不条理を呪い、拒否し、怒り、絶望している。そんな患者に医療者がどう向き合っているのか知りたくて、私は2年前から嘉藤先生のホスピスに足を運んできた。カンファレンスや先生の回診から入院の相談、家族との面談まで、あらゆる業務を見せてもらった。感じたのは「誠実さ」だった。先生だけでなく、看護師も、花を生けて折り紙を折るボランティアもみんなそう。「病気」ではなく、「その人」に真剣に接していた。そうでないと、人生最大の危機に直面している患者と向き合えないのだ。

いくつかの、忘れられない光景がある。

80代の男性Aさんは、前の病院で「あと1週間の命」と言われて転院してきた。いま9日目。嘉藤先生は回診のとき、腰を折って、酸素マスクをつけたAさんの耳元で大きな声を出した。「主治医の嘉藤です。家族の皆さんもここにいますよ！」。ゴーシュー、ゴーシューという呼吸音しかしないのに、硬い表情がほんの少し崩れた。声が届いたのだ。そばにいた妻が目にハンカチを当てた。「1週間と言われていたのに、よく持ちこたえてますね」。生の炎がゆっくりと消え、患者の家族が「遺族」になろうとしている。余命宣告されても、1日、2日と生きている患者。それを見つめる家族。「お父さん、がんばったよね」と思えることで、遺族は大切な人の死を受け入れていく。

70代の男性Bさんの部屋では、いきなり「先生、自殺しようと思っています。賛成してください」と言われた。もう何年も入院し、脊髄に転移してきたがんで歩行不能に。ベッドの生活が今後続くことは本人が一番知っている。「先生には言わなかったけれど、自殺ほう助は美しい行為でもあるんです」。切実だった。それから15分ほど続いたやり取りを、私は身をすくめて聞いていた。互いに無言の時間も多かった。先生は「自殺なんかダメ」と否定はしない。それどころか「私も同じ立場だったらそう思うかもしれない」とつぶやく。後に聞いた話だと、Bさんは薬をきちんと服用し、健康に気を使う人だった。末期の患者の心は揺れる。「死にたい」は、「さびしい」や「怖い」と同じ意味かもしれない。そうだ、と先生は思いつく。「命の大事さを医学生に教えてあげてください！」。元教師のBさんの表情がほころぶ。そして「まったく、先生にはかなわないや」と笑った。

ある日の午後、40代の子宮がんの女性Cさんとは真剣勝負だった。前の病院で抗がん剤、放射線治療を勧められて耐えた。だが病状は進むばかり。主治医を信頼できなくて転院してきた。痛み止めの方法についてしばらく話したあと、「先生、ストレートに聞いていい？」と始まった。

「週単位って、あるかな」

瞬間、意味がわからなかった。主語も修飾語もない、命の残り時間に関する切ない問いかけだと気づく。1、2週間しか自分は生きていられないのか、と。Cさんは、前の病院で「半年」とされた翌週に、余命は「3カ月」と言われたという。絶望の中で「3カ月ももたないんじゃない？」と聞いたら、主治医は黙った……。

「先生も、無口になる？」

何気ないけれど、たぶん命がけの質問だった。

先生は、まっすぐCさんを見つめていた。そして、食欲も出てきたし痛みも治まっているから、週単位ってことはない、と明言した。どのくらいかは言えないけれど。そのあと、とつとつと付け加えた。

「私は、確実なことははっきり言うし、確実でないことは確実でないって言いますから……」

うん、安心した、とCさんは最後に言った。病室を出ると、先生は、ふーっと大きな息をした。広々とした廊下には、やわらかな夕日が差し込んでいた。

人と向き合う、と簡単にいうけれど、実際はものすごく難しい。死を間近にした人とは特にそう。それでも、ホスピスの医療者は「支えたい」と思い続けているのだろう。嘉藤先生は言った。「命を救えぬ無力感はありますが、だからといってウソは言えないし、逃げることもできません。人として誠実にかかわるだけ。私たちの願いは、患者さんが自分の人生を全うすることなんです」

・

【滝野隆浩、写真も】

デジタルプラス 詳報 ＝次回は10月28日掲載

㊤入院患者の脈をとる嘉藤先生。触診はコミュニケーションの第一歩だと考えている
㊦カンファレンスは朝夕、1日に2回。患者の様子が共有される＝いずれも秋田市の外旭川病院ホスピス病棟で